

【十字架の栄光に輝く】

ヨハネ17章6～12節
14.06.01.

▼6～8節で述べられているのは、一言で言えば、教会のことです。
教会のことを想定して言っているのだと考えて読めば、その意味が分かります。

6節。

『世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、
わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、
あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。』 御言葉、つまりは神様の御旨、そしてイエス様の宣教の言葉、新しい戒めであります。この言葉・戒めの中に生きる者、つまり、教会であります。

ここは、一行一行、深い意味が込められているように思われる箇所です。『世から選び出してわたしに与えてくださった人々』『御名を現しました』『彼らはあなたのものでした』『あなたはわたしに与えてくださいました』『彼らは、御言葉を守りました』、教会とは何かということを考える時に、一つ一つが重要であります。

▼まず、『世から選び出して』、このまま真っ直ぐに受け止めなければなりません。

教会員一人ひとりが、自分で決断して、教会に入門したとは書いていません。『選び出し』たのは神であります。このことが、キリスト教と他の宗教との大きな違いになります。入門したのでも、入道したのでも、出家したのでもありません。神によって、『選び出』されたのであります。

この『選び出』されたという理解を嫌う人があります。偉そうだというのであります。他の人よりも優れているように自惚れているというのであります。

それは誤解であります。大きな誤解であります。『選び出』されたということは、他の人よりも特別優れているという意味にはなりません。むしろ、救いの道が与えられたのは、自分の努力ではない、手柄ではない、決断でさえないという意味であり、むしろ、謙遜なのであります。

▼次に、『わたしに与えてくださった人々』、このことは直後に『彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました』と、繰り返し説明されています。

人間という被造物は、創造主なる神のものであります。しかし、神が選び、より分けて、『わたしに与えてくださいました』、キリスト・イエスに与えられたのであります。つまり、キリストのものとなったのであります。

こういう考え方も、嫌う人が少なくありません。信仰を持っていない人は、私は誰のものでもない、自分自身のものだと言うでしょう。信仰を持っている人でも、神のものだとか、キリストのものだとか言うと、違和感を覚えるようであります。

しかし、聖書ははっきりとそのように言い切っています。

▼実は元々の考え方、図式は、正に、所有物のこと、奴隷のことです。

少し遠回りですが、そこからお話しします。

救い、贖いという言葉の本来の意味は、家畜や奴隷を、お金を出して買い取ることであります。

屠殺され肉にされる筈の家畜が、他の飼い主に買い取られ、命を助けられる、そういうことであります。

ここから時間の関係で大幅に飛躍しますが、イエス様は、人間の命を買い取るために、その代価を支払われました。人間の命を買い取るための代価は、十字架でありました。

『わたしに与えてくださいました』とは、そのような意味なのであります。

▼7～8節。

『わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、
今、彼らは知っています。なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、
彼らはそれを受け入れて、
わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、
あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです』
ここも、大変重要だと考えます。
これこそが、教会の立脚点なのであります。

▼イエス様が十字架の出来事によって贖い取ったのが、教会であります。教会はイエス様の所有物であります。

でありますから、他の誰の所有物になってもならないのであります。キリストではない他の神のものになったら大変であります。皇帝や王や領主のものになったら大変であります。かつては、そんな時代がありました。今はそんなことはないかも知れません。

しかし、皇帝や王や領主のものではなくとも、他の誰かのものになっているかも知れません。教会はみんなのものだと言う人があります。これも、間違っています。教会はイエス様の所有物であります。

▼9～10節もまた、教会とは何か、教会員とは誰かということを考えさせられる、決定的に重要な要素を含んでいます。

9節。

『彼らのためにお願いします。世のためではなく、
わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。
彼らはあなたのもものだからです。』

私たちキリスト者は、神のものなのであります。神の民、神の国の国民なのであります。ここで、背景にある考え方は、当時の国家の制度であり、また、奴隷制度のことだと考えます。

私たちは、何に所属するのかという、帰属の意識の問題なのであります。神の民、神の国の国民であり、神のもの、神の僕だから、栄光に輝くのであります。

神の民のバッジを付けている、神の民の制服を着ている、そういう話なのであります。

▼『世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします』、これも重要であります。

『世のためではなく』、こういう表現を嫌う人がいます。しかし、聖書ははっきりと言い切っています。『世のためではなく』

教会はみんなのもの、教会は地域社会に仕えるもの、聞こえは良いですが、そんなことを言う人は、実は、教会は自分のものと思っているのではないのでしょうか。教会を自分のものにしないということは、みんなのものということではありません。イエス様のものとしなくてはならないのであります。

▼10節も同様であります。

『わたしのものはすべてあなたのももの、あなたのもものはわたしのものです。
わたしは彼らによって栄光を受けました。』

特に、最後の、『彼らによって栄光を受けました』という表現は注目すべきだと考えます。十字架によって勝ち取られた神の体としての教会が、イエス・キリストの栄光なのであります。人々の信仰こそが、イエス・キリストの栄光なのであります。

これに類似した表現は、詩編にも数多く見られます。

▼ 11節から、話が新しく展開します。

11節前半。

『わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。』

これは、勿論十字架のことです。

教会は、神の国に赴かれたイエス様が、この地上世界に残された民であり、やがて、迎えられる民であります。この地上世界に残されますが、イエス様の民であり、神の国の民なのであります。

▼ 私たちには、少し分かり難い理屈であります。しかし、ユダヤ人は酷似した体験を持っています。捕囚であり、ディアスポラ、流浪の体験であります。彼らは、この地上に取り残された民であり、この世の中にちりぢりにされた民であり、かつ、神の民であり、やがては、神が約束された土地に集められる民だったのであります。

▼ 11節後半。

『聖なる父よ、
わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。
わたしたちのように、彼らも一つとなるためです』

これは、この言葉だけを独立したものとして受け止めた場合でも、心を動かされるものがあります。

『一つとなるため』、父なる神と子なるキリストが一つであるという意味合いで、一つになるのであります。

一つとなるのは、一つとならなければならないのは、キリストが十字架に架けられた後、この世に残される教会の者であります。

一つとならなければ、教会を守ることは出来ないのであります。

▼ 9節に戻ります。

『彼らのためにお願いします。世のためではなく、
わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。
彼らはあなたのもものだからで』

何度も言いますが、『世のためではなく』なのであります。こういう表現は嫌われるようですが、聖書そのものが明言しているのであります。

『世のためではなく』なのであります。

教会は、『世のために存在するのではなく』、やがて神の国に向かう民のために存在するのであります。

地上から神の国に向かう、中継ステーションなのであります。

▼ この頃の駅ナカはすごいですね。先日東京駅をうろつきました。何でうろついたかという謎子になったからで、日本橋で降りたのに、気が付いたら八重洲に居まして、仕方なしに、ラーメンを食べて、元気を取り戻してから、また歩き回り、とうとう日本橋の用事は諦めて、新宿に向かいました。

渋谷も再開発されるそうですし、どこの駅も新しくなっています。駅の中で1日過ごせそうです。

しかし、駅は駅です。駅はどこかに向かうための中継ステーションであります。駅が中継ステーションであることを忘れて、駅は駅として成り立つものでしょうか。

駅は良いかも知れません。しかし、教会は、教会が神の国を目指す中継ステーションでなくなっただけならば、もう、教会ではありません。

▼12節。

『わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。』

『滅びの子』とは、ユダのことでしょうか。特定する必要はないでしょうか。

何れにしても、『滅びの子』も存在するのであります。

しかし、『滅びの子』の他は、守られて、神の国に入れられるのであります。そうしますと、『滅びの子』とは、神の国を望まない者のことではないでしょうか。

神の国など入らないし、行きたくもない、ずっと教会で過ごしたい、だから教会は駅ナカのように、何でもそろっていて、楽しい方が良いという人は、おそらくは、教会を愛する者とは言えず、逆に、『滅びの子』なのであります。

▼13節。

『しかし、今、わたしはみもとに参ります。

世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。』

『わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれる』、これは前回この箇所でお話した時に詳しく申し上げたプレーローマーであります。

簡単に繰り返します。

初代教会の時代、当時のギリシャ世界には、プレーマー論という哲学がありました。日本語では充溢論と言います。遡れば、プラトンのイデア論に行き着く思想であります。

漫画的になるほど簡単に説明しますと、カクテルグラスをピラミッド状に積み重ねた姿を連想して下さい。そのてっぺんのグラスに、ワインを入れたとします。やがて溢れて、2段目のグラスに注がれて行きます。これも一杯になって溢れると、というような具合に、だんだん、一番下まで、ワインが行き渡っていくのであります。

そして、肝心なことは、一番上では、純粹であったワインが、下に落ちるにつれて、だんだん、別のものに変質して行くのであります。

一番上が、神の愛だったとすれば、2段目では、家族の愛になり、3段目では、恋愛になり、その下では、欲望になると言った具合であります。

▼勿論、このプレーマー論と、今日の箇所とを同一視することは乱暴であります。しかし、私たちに極めて異質を感じる、この思想が、今日の箇所の下敷きになっていることは否定出来ません。少なくとも、当時の人々にとっては、馴染みのある思想であり、分かり易いのであります。

私たちに、混乱や誤解の元になりかねませんが、当時の人々にとっては、むしろ、分かり易いのであります。

▼主の十字架の栄光が、下に落ちるに連れて汚れてはなりません。不純物を混ぜてはなりません。私たちは、主の十字架の栄光に直接に与り、それこそ、真の喜びに溢れるのであります。

他のものを混ぜてしまうと、豊かさを増したように見えることもあるかも知れませんが、真の喜びはないのであります。

▼主の十字架の栄光は、苦難から生まれたものであります。私たちもまた、十字架を負うのであれば、そこには栄光もありません。